

長岡空襲から66年 平成23年度非核平和都市宣言市民の集い

平和を誓い・後世に語り継ぐ

ながおか平和フォーラムに450名・平和の森コンサートに1000名

れんごう中越地協

第722号 2011. 8. 11
連合中越地域協議会
長岡市東蔵王2-2-68
TEL 0258-24-0515
FAX 0258-24-8930
発行人 矢島 良彦
定 価 1部10円



昭和20年8月1日の長岡空襲から66年をへた8月1日(月)午前8時に平和の森公園で市民など約500名が参加して、非核平和都市宣言市民の集いが開かれた。

非核平和都市宣言市民の集いは参加者全員が、悲惨な歴史に目をそらすことなく、後世に長岡空襲の記憶を一人一人が伝え、世界平和につながる大切さを平和像の由来について田村新教組執行委員長が話された。

昭和59年県内で初めて制定された非核平和都市宣言が新潟県原爆被害者の会長岡支部の西山支部長から朗読、平和の放鳩。続いて、主催者の森長岡市長からは、空襲から66年が経過した

の話を、空襲で当時1歳半だった娘の美智子さんを亡くされた七

里アイさんが「空襲警報のサイレンとともに平潟神社へ逃げ、焼夷弾の炎に包まれ柿川に逃げた。背中に負ぶった娘さんはやけどで亡くなった。娘を亡くし



自分だけ生き残った後悔の念を持ち続けている「こと等切なくも忘れることのできない話

ながおか平和フォーラム 広島・長岡両市中学生の意見交換と講演

ながおか平和フォーラムが8月1日(月)13時30分からリリックホールで開かれ450名の市民が参加した。

第1部は、広島・長岡両市の中学生による「心に平和の砦を築くために、今、私達に出来ることは」と題しての意見交換。「世界の平和の現状は100点満点中何点か」の質問で始まった。50点、30点や1%でも紛争があればだめだから0点という生徒もいた。



が述べられた。広島平和記念式典に参加する中学生には、小学生が平和への願い



月末に新潟・福島で発生した集中豪雨による水害により被災された皆様へ心よりお見舞い申し上げます。▼昨年からの異常気象とも言うべき猛暑や大雨などニュースが夏場に多く聞くようになりまし。この夏も特に注意したいのが熱中症です。夏の高熱時に、カラダが脱水状態になると、筋肉の痙攣、だるさやめまいを感じて、屋内で過ごしていても熱中症を起こすといわれています。▼高温多湿の日本では、気温27度以上で湿度が70%以上、日差しが強く、風がない、などの環境の下で起こりやすくなります。特に気温が32度以上になると、熱中症には要注意です。▼熱中症の防止対策は

東蔵王2 <<No.51>> 副議長 田野 吉昭

いろいろなありますが、こまめな水分・塩分や電解質のミネラルを含んだスポーツドリンクを飲むことが一番です。間違った水分補給としてお茶やコーヒー、ビールなど4%以上アルコールが入っている飲み物は利尿作用があり、逆にカラダから水分を排出してしまます。個人差はあるが人間のカラダは一度に250cc以上の水分は吸収できず尿として排出されてしまます。がぶ飲みも胃腸に負担をかけるだけになってしまます。▼これからまだまだ暑い日が続くと思います。が、胃腸も健康な状態にし、こまめに飲み物を適量補給して、この暑い夏を元気に乗り切りましょう。



平和の森コンサート 梅原司平ライブ

第17回平和の森コンサートが、7月31日(日)18時40分から平和の森公園で開かれました。前日の大雨で開催も危ぶまれたが、約1000名が参加した。

第1部の長岡少年少女合唱団による合唱は、心が洗われる歌

だった。続くフルート・ピアノ・キーボード演奏も空気の澄みきった夜空に響いて、平和を感じとったのではないだろうか。



い、楽しいトークもあって、参加者も一体となったコンサートであった。長岡市では「この空の花―長岡花火物語」の撮影が行われている。会場となった平和の森公園もロケ地となっている。世界平和を祈るコンサートの音や響きが世界中に木霊してほしいものだ。

サラリーマン川柳(大さじも 小さじもいらぬ 母の味)(気は心 そうは言っても 下心)(台所 つかわず出来る 晩ごはん)(各部屋で 同じ番組 みる家族)

平和宣言

66年前、あの時を迎えるまで、戦時中とはいえ、広島市民はいつも通りに生活していました。かつて市内有数の繁華街であった、ここ平和記念公園の地にも、多くの家族が幸せに暮らす姿がありました。当時13歳だった男性は、打ち明けます。――「8月5日は、中学2年生の私にとっては久しぶりに一日ゆっくり休める日曜日でした。仲よしだった同級生を誘って、近くの川で時間の経つのも忘れて夕方まで、砂場でたわむれ、泳いだのですが、真夏の暑いその日が彼との出会いの最後だったのです。」

ところが、翌日の8月6日午前8時15分に、一発の原子爆弾でそれまでの生活が根底から破壊されてしまいます。当時16歳だった女性の言葉です。――「体重40キロの私の体は、爆風に7メートル吹き飛ばされ意識を失った。意識が戻ったとき、辺りは真っ暗で、音の無い、静かな世界に、私一人、この世に取り残されたように思った。私は、腰のところにボロボ布をまとっているだけの裸体で、左腕の皮膚が5センチ間隔で破れクルクルッと巻いていた。右腕は白っぽくなっていた。顔に手をやると、右頬はガサガサしていて、左頬はねっとりしていた。」

原爆により街と暮らしが破壊し尽くされた中で、人々は、とまどい、傷つきながらもお互いに助け合おうとしました。――「突然、『助けて！』『おかあちゃん助けて！』泣き叫ぶたくさんの声が聞こえてきた。私は近くから聞こえる声に『助けてあげる』と呼びかけ、その方へ歩み寄ろうとしたが、体が重く、何とか動いて一人の幼い子供を助けた。両手の皮膚が無い私は、もう助けることはできない。…『ごめんなさい』…。」

それは、この平和記念公園の地のみならず、広島のいたるところに見られた情景です。助けようにも助けられなかった、あるいは、身内で自分一人だけ生き残ったことへの罪の意識をいまだに持ち続けている人も少なくありません。

被爆者は、様々な体験を通じて、原爆で犠牲となった方々の声や思いを胸に、核兵器のない世界を願い、毎日を懸命に生き抜いてきました。そして、被爆者をはじめとする広島市民は、国内外から心温まる多くの支援を受け、この街を蘇らせました。

その被爆者は、平均年齢77歳を超えながらも、今もって、街を蘇生させた力を振り絞り、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求し続けています。このままで良いのでしょうか。決してそうではありません。今こそ私たちが、すべての被爆者からその体験や平和への思いをしっかりと学び、次世代に、そして世界に伝えていかなければなりません。

私は、この平和宣言により、被爆者の体験や平和への思いを、この世界に生きる一人一人に伝えたいと考えています。そして、人々が集まる世界の都市が2020年までの核兵器廃絶を目指すよう、長崎市とともに平和市長会議の輪を広げることに力を注ぎます。さらに、各国、とりわけ臨界前核実験などを繰り返す米国を含めすべての核保有国には、核兵器廃絶に向けた取組を強力に進めてほしいのです。そのため、世界の為政者たちが広島の地に集い核不拡散体制を議論するための国際会議の開催を目指します。

今年3月11日に東日本大震災が発生しました。その惨状は、66年前の広島の姿を彷彿させるものであり、とても心を痛めています。震災により亡くなられた多くの方々への御冥福を心からお祈りします。そして、広島は、一日も早い復興を願い、被災地の皆さんを応援しています。

また、東京電力福島第一原子力発電所の事故も起こり、今なお続いている放射線の脅威は、被災者をはじめ多くの人々を不安に陥れ、原子力発電に対する国民の信頼を根底から崩してしまいました。そして、「核と人類は共存できない」との思いから脱原発を主張する人々、あるいは、原子力管理の一層の厳格化とともに、再生可能エネルギーの活用を訴える人々がいます。

日本政府は、このような現状を真摯に受け止め、国民の理解と信頼を得られるよう早急にエネルギー政策を見直し、具体的な対応策を講じていくべきです。また、被爆者の高齢化は年々進んでいます。日本政府には、「黒い雨降雨地域」を早期に拡大するとともに、国の内外を問わず、きめ細かく温かい援護策を充実するよう強く求めます。

私たちは、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、「原爆は二度とごめんだ」、「こんな思いをほかの誰にもさせってはならない」という思いを新たにし、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に全力を尽くすことを、ここに誓います。

平成23年（2011年）8月6日

広島市長 松井 一實

平和宣言

今年3月、東日本大震災に続く東京電力福島第一原子力発電所の事故に、私たちは愕然としました。爆発によりむきだしになった原子炉。周辺の町に住民の姿はありません。放射線を逃れて避難した人々が、いつになったら帰ることができるのかもわかりません。

「ノーモア・ヒバクシャ」を訴えてきた被爆国の私たちが、どうして再び放射線の恐怖に脅えることになってしまったのでしょうか。

自然への畏れを忘れていなかったか、人間の制御力を過信していなかったか、未来への責任から目をそらしていなかったか……、私たちはこれからどんな社会をつくろうとしているのか、根底から議論をし、選択をする時がきています。

たとえ長期間を要するとしても、より安全なエネルギーを基盤にする社会への転換を図るために、原子力にかわる再生可能エネルギーの開発を進めることが必要です。

福島原発事故が起きるまで、多くの人たちが原子力発電所の安全神話をいつのまにか信じていました。

世界に2万発以上ある核兵器はどうでしょうか。

核兵器の抑止力により世界は安全だと信じていないのでしょうか。核兵器が使われることはないと思い込んでいないのでしょうか。1か所の原発の事故による放射線が社会にこれほど大きな混乱をひきおこしている今、核兵器で人びとを攻撃することが、いかに非人道的なことか、私たちははっきりと理解できるはずで

世界の皆さん、考えてみてください。私たちが暮らす都市の上空でヒロシマ・ナガサキの数百倍も強大になった核兵器が炸裂する恐ろしさを。

人もモノも溶かしてしまうほどの強烈な熱線。建物をも吹き飛ばし押しつぶす凄まじい爆風。廃墟には数え切れないほどの黒焦げの死体が散乱するでしょう。生死のさかいでさまよう人々。傷を負った人々。生存者がいたとしても、強い放射能のために助けに行くこともできません。放射性物質は風に乗り、遠くへ運ばれ、地球は広く汚染されます。そして数十年にもわたり後障害に苦しむ人々を生むことになります。

そんな苦しみを未来の人たちに経験させることは絶対にできません。核兵器はいらない。核兵器を人類が保有する理由はなにもありません。

一昨年4月、アメリカのオバマ大統領は、チェコのブラハにおいて「核兵器のない世界」を目指すという演説をおこない、最強の核保有国が示した明確な目標に世界の期待は高まりました。アメリカとロシアの核兵器削減の条約成立など一定の成果はありましたが、その後大きな進展は見られず、新たな模擬核実験を実施するなど逆行する動きさえ見られます。

オバマ大統領、被爆地を、そして世界の人々を失望させることなく、「核兵器のない世界」の実現に向けたリーダーシップを発揮してください。

アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国など核保有国をはじめとする国際社会は、今こそ核兵器の全廃を目指す「核兵器禁止条約（NWC）」の締結に向けた努力を始める時です。日本政府には被爆国の政府として、こうした動きを強く推進していくことを求めます。

日本政府に憲法の不戦と平和の理念に基づく行動をとるよう繰り返し訴えます。「非核三原則」の法制化と、日本と韓国、北朝鮮を非核化する「北東アジア非核兵器地帯」の創設に取り組んでください。また、高齢化する被爆者の実態に即した援護の充実をはかってください。

長崎市は今年、国連や日本政府、広島市と連携して、ジュネーブの国連欧州本部に被爆の惨状を伝える資料を展示します。私たちは原子爆弾の破壊の凄まじさ、むごさを世界のたくさんの人々に知ってほしいと願っています。

「核兵器のない世界」を求める皆さん、あなたの街でも長崎市と協力して小さな原爆展を開催してください。世界の街角で被爆の写真パネルを展示してください。被爆地とともに手を取り合い、人間が人間らしく生きるために平和の輪をつなげていきましょう。

1945年8月9日午前11時2分、原子爆弾により長崎の街は壊滅しました。その廃墟から、私たちは平和都市として復興を遂げました。福島の皆さん、希望を失わないでください。東日本の被災地の皆さん、世界が皆さんを応援しています。一日も早い被災地の復興と原発事故の収束を心から願っています。

原子爆弾により犠牲になられた方々と、東日本大震災により亡くなられた方々に哀悼の意を表し、今後とも広島市と協力し、世界に向けて核兵器廃絶を訴え続けていくことをここに宣言します。

2011年（平成23年）8月9日

長崎市長 田上 富久